

NHK ラジオ番組『幼児の時間』「リズム遊び」(あそびましょう) における中田喜直・小林純一の共作

— 放送台本の分析を中心に —

On the Collaborative Works of NAKADA, Yoshinao and KOBAYASHI, Jun'ichi on the Segment
“RIZUMU-ASOBI: ASOBIMASHŌ” of NHK Radio Program “YŌJI-NO-JIKAN”
: An Analysis of Broadcast Scripts

葛 西 健 治
KASAI, Kenji

Abstract

During their three-year collaboration on “ASOBIMASHŌ”, Nakada and Kobayashi created 50 new children’s songs together. At the beginning and end of the series, new works were vigorously produced. In the interim period, there were fewer opportunities to present new works, but there were frequent re-performances of the collaborations that had previously been broadcast. An examination of the contents of their self-selection book published later reveals that the frequency of re-performances in the program did not necessarily coincide with their self-evaluation of their collaborations. Many of the works in “ASOBIMASHŌ” are rarely sung today. However, the musical and cultural value of the works should be reconsidered with careful analysis in the future.

Based on the broadcast scripts, I examined the content of “Ahiru no Gyōretsu” and “Ōkina Taiko,” and found that both have onomatopoeia at the center of the lyrics, and that they are simple Rhythm Plays based on the actions evoked from the lyrics. In the case of “Ōkina Taiko,” there were as many as five variations of the song in a single broadcast. Kobayashi’s creative stance of inviting children to Rhythm Play based on onomatopoeia seems to have been one of his optimal solutions to the limitations of “radio broadcasting,” in which the auditory sense is the only source of information.

キーワード：子どもの歌、中田喜直、小林純一、NHK ラジオ、オノマトベ

0. はじめに

作曲家・中田喜直（1923-2000）は生涯に数多の子どもの歌を創作したが、中でも筆者が注目し研究に取り組んできたのが詩人・小林純一（1911-1982）との共作である。彼らの共作には歌詞にオノマトベを含むものが多くあり、その音楽的表現における完成度の高さ、質的な充実について、筆者は楽曲分析を通して明らかにしてきた。

小林は「童謡の擬声語について」(1951) という雑誌記事の中で、「幼児の遊戯本能と擬声語の結びつき」(p. 14) について言及し、子どもの歌の創作におけるオノマトベの有用性を評価する姿勢を示している。中田には直接オ

ノマトベの扱いについて触れた文献は見出せていないが、「詩と音楽の一致」を目指す点で小林と理念を共有しており、小林との共作である「歌」においてその理念が結実することは必然であると言えよう。

彼らの代表作には《あひるのぎょうれつ》《大きなたいこ》など、現在も保育の場で歌い継がれている作品をいくつか挙げるができるが、それらはNHK ラジオ番組『幼児の時間』の曜日番組の1つ「リズム遊び」(あそびましょう)における協働の中で生まれたものである。当該ラジオ番組における中田・小林の協働の成果については、先行研究において一部触れられてはいるものの¹⁾、その詳細を明らかにした研究は筆者の知る限り見当たらない。

そこで本稿ではまず、彼らの協働の場となった「あそびましょう」の放送内容について調査を行い、その中で

こども教育宝仙大学 准教授

創作・発表された中田・小林の共作の全容を詳らかにする。更に、共作を用いたリズム遊びの実例の一部を検証し、子どもの歌の創作に対する中田・小林の創意、創作理念の一端を明らかにしたい。

1. 研究方法—資料の状況

現在(2022年9月)、NHKはインターネット上に「NHKアーカイブス」を開設し「過去に放送したテレビ番組や映像素材とその関連資料を最新のデジタルシステムで一元的に保管し、貴重な映像資料を次世代へと伝え」²る取り組みを行っている。上記ホームページにおける一般向けの情報提供とは別に、研究者向けには公募制による「学術利用トライアル」のサービスを提供しているが、閲覧できるコンテンツについては、残念ながら「NHKが組織的な保存を始めた1981年以降のものが中心で、過去に放送された番組全てがあるわけではない」³ないことが、「学術利用トライアル」のトップページ上に明記されている。

「あそびましよう」は1952(昭和27)年から1954(昭和29)年にかけて、当時のNHKラジオにおいて放送された番組であり、当然ながら録音データは現存していない。

そこで筆者は、NHK放送博物館が所蔵する当該ラジオ番組の放送台本を掘りどころとし、中田・小林の共作を中心に放送内容の調査分析を行うこととした。また同館内において閲覧可能な番組確定表(PDF形式)を併用しながら、適宜情報の確認、整理を行った。

「あそびましよう」の放送台本は3つ(第1～26回/第27～51回/第52～73回)に分冊されており、原本は全て縦書き、手書きで記されている。NHK放送博物館の所蔵本は原本の写しを製本したものであるが、小林による直筆の署名(表紙への書き込み)や、番組制作の過程で小林が書き加えたと思われる修正の跡が随所に残されており、元は小林の所蔵(実際の使用)品であったことが推察される。

なお、第43回(1953(昭和28)年8月29日)放送分のみ、台本が欠落している⁴。

2. 「あそびましよう」概要

2. 1. 基礎情報

「あそびましよう」はNHKラジオ番組『幼児の時間』(月～土、各曜日15分間の放送⁵)の曜日番組「リズム遊び」の1シリーズとして、第1回(1952(昭和27)年1月12日)から第73回(1954(昭和29)年10月26日)まで約3年間に渡り、隔週で放送された。

本稿では放送局、曜日、放送時間等の変遷をもとに、

全体を以下の4期に区分する。

第1期/第1～12回

(第2放送、土曜日、9:45～10:00)

第2期/第13～33回

(第1放送、土曜日、9:30～9:45)

第3期/第34～51回

(第1放送、土曜日、9:45～10:00)

(特番/第52回(第1放送、月曜日、9:45～10:00))

第4期/第53～73回

(第1放送、火曜日、9:45～10:00)

なお番組名等の表記については放送台本の内部でも様々に異同が見られるが⁶、本稿では番組確定表に従って「リズム遊び」「あそびましよう」に統一する。ただしシリーズのタイトルである「あそびましよう」については、放送台本では一貫して「あそびましょ(よ)」と、「う」のない表記が用いられており、同名のテーマ曲(共作)のタイトル及び出版譜における詩の表記も同様に「あそびましょ」とされていることを付記しておく。

因みに、「あそびましよう」に先立つ「リズム遊び」は、「みんないちゃん」⁷というタイトルのシリーズであつたらしい。1952(昭和27)年1月5日に最終回を迎えているが、翌週の1月12日には早くも「あそびましよう」の放送がスタートしている。

2. 2. 各回の主な内容と構成、選曲

放送台本をもとに、各回の主な内容と構成、また選曲の概要を以下にまとめる。

毎回、番組の冒頭ではテーマ曲《あそびましょ》が合唱団によって歌われる。その後、コグマのプーちゃん、コブタのキイちゃん、タヌキのポンちゃんというキャラクターを中心に、童話劇スタイルの進行でお話が展開される⁸。各回毎に2～3曲の歌(BGMとして抜粋、部分使用される場合もある)が用いられ、そのうちの1曲をメイン曲として鑑賞、歌唱指導、リズム遊び(手遊び、体遊び等)の指導が行われる。特にメイン曲については、子どもがその歌を覚えて遊べるまでのスパンを考慮し、1回の放送(15分間)のうち、少なくとも3回以上は繰り返して演奏、指導がなされていたようである。

メイン曲の多くは共作(新作)であるが、特に第2～3期にかけては《肩たたき》(第16回/詞:西条八十曲:中山晋平)、《シャボン玉》(第46回/詞:野口雨村曲:中山晋平)など、既存の歌が採用された例も少なくない。

またメイン曲以外の選曲に関しては、放送日の季節や時候を意識した例が多く見られる⁹。

3. 共作の全容

放送台本には歌のタイトルが、詩の本体と共に細かく記載されている。本稿では全73回（台本の欠落した第43回を除く）の全ての使用曲を調査した上で、中田・小林による共作を全て抽出した。以下、表1に放送日（初演年月日）と曲目を整理する。

前述の番組名の表記と同様に、放送台本の内部では歌（詞）のタイトルについてもかなりの異同が見られるため、本稿（表）では、共作の収録曲数が最も多く（初版：43曲、改訂増補：4曲追加）、中田による校訂が推認で

きる中田の自選集『かわいいかくれんぼ（中田喜直童謡曲集）』（初版：昭和30(1955)、改訂増補：昭和59(1959)、野ばら社）におけるタイトルの表記法に準拠し、全体を修正・統一することとした。ただし、『手を叩きましょう』については楽譜の収録が確認できた『新しく選んだ童謡曲集』（1961、カワイ楽譜）¹⁰に、『あひるのぎょうれつ』については、小林の自選集『“あひるのぎょうれつ”小林純一詩 子どもの歌曲集』（1964、フレーベル館）に別途従った。

共作の総数は50である。ただし、『手を叩きましょう』は中田の「編曲作品」であり、狭義には純粋な共作とは

表1 共作の放送回・放送日（初演年月日）・曲目（タイトル）一覧

回	放送日	曲目	備考
1	270112	あそびましよう おつむてんてん	番組テーマ曲
2	270126	大きなたいこ	
3	270209	ゆきゆきこんこん	
4	270223	きゅっきゅっきゅ	
5	270308	チリンチリンじてんしゃ	
6	270322	シーソー	
7	270405	ひらひらちょうちょう	
8	270419	いもむしごろごろ	
9	270503	じゃぶじゃぶせんたく	
10	270517	おそうじ	
11	270531	かっちゃんこっちゃん	
12	270614	雨だれ	
13	270621		
14	270705	（手を叩きましょう）	
15	270719		
16	270802		
17	270816		
18	270830		
19	270913	おまつり	
20	270927		
21	271011		
22	271025	おちばのおもちゃ ひらひら木の葉	
23	271108		
24	271122	すずめのおやど	
25	271206		
26	271220	もちつき	
27	280117		
28	280131		
29	280214		
30	280228	おしくらまんじゅう	
31	280314		
32	280328	かなづちとんとん	
33	280411		
34	280425	花あそび	台本上のタイトルは《おはな》
35	280509		
36	280523	あるきましようはしりましよう	
37	280606		
38	280620	おすもうさん	
39	280704		
40	280718	みずぐるま ぎっちらおふね	
41	280801		
42	280815	どうぶつあそび	
43	280829		台本欠落
44	280912		
45	280926	お百しょうさん	
46	281010		
47	281024	小鳥あそび	
48	281107		
49	281121	なわとび	
50	281205	大工さん	
51	281219		
52	290104	あひるのぎょうれつ	正月特番
53	290119		
54	290202	ゆきなげあそび	
55	290216		
56	290302	五人ばやし	
57	290316		
58	290330		
59	290413		
60	290427	かざぐるま	
61	290511	まねっこあそび	
62	290525	ひよこのおさんぽ	
63	290608	とべとべひこうき	
64	290622	ままごとあそび	
65	290706	スワンよスワン	
66	290720	とびこめシャワーに きんきんきんぎょ	
67	290803	ほたるがり	
68	290817	ぎっこんポンプ 水まき	台本上のタイトルは《ポンプ押し》
69	290831	えっちら山のぼり	
70	290914	手まりのなかではねるはどなた 十五夜お月さん	
71	290928	きしゃごっこ	
72	291012	かぼかぼこうま	
73	291026		最終回

注1）放送日の6桁の数字は「昭和 年月日」を表す

注2）二重線は4期の区分（第52回は正月特番）を表す

注3）共作の初演のない放送回は塗りつぶしで明示した（再演はこの限りでない）

呼べないものの、参考として本表に含めることとした。作曲年月日を明らかにするまでには至らなかったが、これらの共作がラジオ放送のための新作として創られた経緯に鑑みれば、作品の誕生は初演年月日とほとんど軌を一にしているとみなして差し支えないだろう。

3. 1. 第1期 (第1~12回)

共作の全容を放送の期区分毎に概観すると、それぞれに特徴を見出すことができる。

第1期では例外なく、毎回1曲の新作(共作)が発表されていることがわかる。放送台本によると、新作はその回のメイン曲¹¹として扱われ、その直後(隔週放送であったため、2週間後)の回には、次に発表される新作に接続する形で必ず再演がなされていたようである。

例えば、第1回に初演された《おつむてんてん》の再演は、以下のような台詞を挟んで第2回発表の新作《大きなたいこ》の初演に接続されている。

お話 このあいだは、コグマのプーちゃんといっしょに、お手手のあそびをしましたね。ぶうぶうコブタのキイちゃんや、ぼんぼんタヌキのポンちゃんといっしょに。・・・おぼえていますか。「おつむ てんてん」・・・

(※《おつむてんてん》演奏)

お話 ほら、できましたね。よく、おぼえていましたね。・・・コブタのキイちゃんは、おててがみじかくて、おつむをたたけなくて、泣いていましたね。だから、きょうは、あんよのおあそびをするって、おやくそくしたでしょう。

(中略)

(※《大きなたいこ》演奏)

(中略)

お話 「大きなたいこ」っていったら、おててで大きなたいこをつくりましょう。いいですか、ほら、

M — 歌一小節「大きなたいこ・・・」B.G —

お話 ほら、大きなたいこをつくって、(形の説明を入れてやる)できましたね。「ドーン ドーン」で、どしん、どしんて、足ぶみしましょう。いいですか、ほら、

(放送台本の原本は全て縦書きであるが、本稿では便宜上横書きに変換して引用・掲載する(以下同))
(下線、斜体部分は筆者による)

上記の台本にあるように、《おつむてんてん》の「お手手のあそび」から《大きなたいこ》の「あんよのおあそび」へ、というように、小林は新作同士の接続において一連の流れを企図していたことが読み取れる。

第1期ではこの方針が一貫しているが、この間に毎回発表された新曲(共作)は、台本と詩を担当する小林の計画に則って、中田が付曲したものと考えられる。

3. 2. 第2期 (第13~33回)

チャンネルが第2放送から第1放送に移行し、放送時間も15分繰り上がって9:30~9:45の時間帯となった第2期では、第1期に比べて極端に共作の数が減少している。毎回新たに共作が発表されていた第1期とは対照

的に、第2期は全20回の放送中わずか8曲(「編曲作品」である《手を叩きましょう》を含む)しか共作が生み出されていない。

放送台本によると、第2期では既存の歌をメイン曲として採用した例が多かったようである¹²。特に第2期の初回である第13回(1952(昭和27)年6月21日)は、第1期までの隔週放送のリズムから逸脱し、中1週間(第12回の放送日は同年6月14日)で放送が組まれていることから、番組制作のスケジュールに余裕がなく、新たな共作を仕上げる余裕がなかった可能性も考えられる。第13回ではBGMとして《アメフリ》(詞:北原白秋 曲:中山晋平)が部分的に使用され、メイン曲には《むすんでひらいて》が採用されている。

なお、新しい共作の発表の機会は大いに減少しているものの、第2期では第1期に発表された新作（テーマ曲《あそびましよう》を除く12曲）が、番組の中で述べ14回再演されている。

3. 3. 第3期（第34～51回）

第3期は放送時間が15分繰り下がり、第1期と同じ9：45～10：00に戻った期間である。チャンネル（第1放送）と曜日（土曜日）は第2期を引き継いでいる。

第3期の初回である第34回（1953（昭和28）年4月25日）では《花あそび》（※台本上のタイトルは「おはな」）が共作として発表されているが、そこからはほぼ隔回（日程ベースで言えば4週間おき、約1ヶ月間に1作）のペースで新たな共作が発表されており、それらはいずれも当該放送回のメイン曲として扱われている。放送台本によれば、新作発表の合間の回では、知名度の高い既存曲¹³や、それまでの放送の中で発表された新作の再演をもってメイン曲としていたようである。

第2期はいわば、新たな共作発表のブランクの期間であったが、第3期はおそらく計画的に、中田・小林の双方が無理のないペースを保ちながら、着実に共作を生み出そうと試みた時期であったと考えられる。

3. 4. 第4期（第53～73回）

正月の特別番組として放送された第52回（1954（昭和

29）年1月4日（月）については4項にて詳述する。

第4期は「あそびましよう」の最終盤である。チャンネル（第1放送）と放送時間（9：45～10：00）は第3期を引き継いでいるが、放送曜日が土曜日から火曜日へ移行している。

しばらくは新たな共作の発表が下火となるが、第60回（1954（昭和29）年4月27日）以降、第72回（1954（昭和29）年10月12日；最終回の直前）にかけては毎回欠かさことなく新たな共作が生み出され、中には一度の放送回で2つの新作が発表された例もある（第66、68、70回）。

シリーズの締め括りに向けて一層意欲的に協働に取り組もうとした中田・小林の矜持がうかがえる。なお最終回、第73回（1954（昭和29）年10月26日）では既存の歌を1曲も使用せず、全て番組内で生まれた共作を再演する形でシリーズを締め括っている（詳しくは後述する）。

3. 5. 放送回数と出版譜の有無（楽譜の所在）

次に共作の全体を「あそびましよう」における放送回数（再演）の多い順に整理し、更に、作者である中田・小林による自作への評価を検討するための一材料として、出版譜の有無（楽譜の所在）に関する情報を加えたものを表2にまとめる。

出版譜の有無（楽譜の所在）の確認に当たっては、中田・小林が単独ないしは共同で編者を務めた、以下、5つの曲集を典拠とした（表及び本項では、アルファベッ

表2 放送（再演）回数ランキングと楽譜の所在

順位	放送回数	回	曲目	N1	N2	K	B1	B2	備考
1	73	1	あそびましよう	54					番組テーマ曲
2	10	5	チリンチリンじてんしゃ	58	142	60	32		
3	8	7	ひらひらちようちよう	76		20	75	75	
4	7	1	おつむてんてん	55					
5	5	2	大きなたいこ	56	108	86	37	37	
		3	ゆきゆきこんこん	60					
		10	おそうじ	83	114	87			
		14	（手を叩きましよう）		146				
6	4	4	きゅつきゅつきゅ						楽譜未確認
		9	じゃぶじゃぶせんたく	221					
		36	あるきましようはしりましよう	232					
7	3	8	いもむしごろごろ	57					
		11	かっちゃんこっちゃん	74	122				
		12	雨だれ		96				
		52	あひるのぎょうれつ	70	94	70	45	45	
8	2	6	シーソー	63					
		30	おしくらまんじゅう	67					
		38	おすもうさん	78					
		42	どうぶつあそび						楽譜未確認
		50	大工さん						楽譜未確認
		65	スワンよスワン		134				
9	1	69	えっちら山のぼり	77					
		19	おまつり	216					
		22	おちばのおもちや	222					

22	ひらひら木の葉	84	66					
24	すずめのおやど							楽譜未確認
26	もちつき	217						
32	かなづちとんとん	72						
34	花あそび	73						
40	ぎっちらおふね	81						
40	みずぐるま	80						
45	お百しようさん	64						
47	小鳥あそび	66						
49	なわとび							楽譜未確認
54	ゆきなげあそび	69						
56	五人ばやし	220						
60	かざるま	62				8		
61	まねっこあそび	224						
62	ひよこのおさんぽ	226						
63	とべとべひこうき	218						
64	ままごとあそび	235						
66	きんきんきんぎょ	228				34		
66	とびこめシャワーに	240						
67	ほたるがり	65						
68	ぎっこんボンブ	61						
68	水まき							楽譜未確認
70	十五夜お月さん	238						
70	手まりのなかではねるはどなた	230						
71	きしゃごっこ	225						
72	かぼかぼこうま	229					96	96

注1) N1～B2欄の数字は、該当する曲集における楽譜の掲載ページを表す。
注2) 楽譜の所在が確認できなかった共作は、行全体を塗りつぶしで明示した。

トによる以下の略記を用いることとする)。

- N1 (中田自選) 『かわいいかくれんぼ 中田喜直童謡曲集』(初版：昭和30(1955)、改訂増補：昭和59(1959)、野ばら社)
 N2 (中田選) 『新しく選んだ童謡曲集』(1961、カワイ楽譜)
 K (小林自選) 『“あひるのぎょうれつ” 小林純一詩子どもの歌曲集』(1964、フレーベル館)
 B1 (両者選) 『新訂 現代こどものうた名曲全集』(1969、音楽之友社)
 B2 (両者選・中田改訂) 『二訂 現代こどものうた名曲全集』(1990、音楽之友社)

《あそびましょ》は番組テーマ曲として毎回冒頭に演奏されたため、放送回数としては当然1位となるが、番組の主たる内容(リズム遊び)とは直接関わりのない作品である。

リズム遊びの本体を担う作品として、実質的に最も再演の機会が多かったのは2位(10回)の《チリンチリンじてんしゃ》である。出版譜についても4つの曲集に所在を確認できるが、最も新しいB2においてはその収載が見送られている。B1からB2への改訂は、小林の死去を受けて中田が単独で行っており、《チリンチリンじてんしゃ》の掲載中止には中田による何らかの意図があったものと思われる。

3位(8回)の《ひらひらちょうちょう》は、N2を除く全ての曲集(いずれも中田・小林による自選集)に収載されている。

4位(7回)の《おつむてんてん》の楽譜の収載はN1のみである。番組での重用とは裏腹に、中田・小林は作品としての価値をあまり高く評価していなかった可能性がある。

5位(5回)から8位(2回)までは、それぞれの順位に複数の作品が含まれている。ここでは注目すべき作品を抜粋して考察を述べたい。

第5位(5回)の《大きなたいこ》は中田・小林の共

作の中でも最も知られた作品の1つであり、現在もEテレの子ども向け番組の中でしばしば取り上げられている¹⁴。シリーズの放送開始から間もない第2回で発表された作品であるが、その後の番組内でも複数回再演され、楽譜に関しても本項で典拠とした5つの曲集の全てに収載されている。まさに自他共に認める、中田・小林による共作の白眉であると言っても過言ではない。

《大きなたいこ》と同様に、本項で典拠とした5つの曲集の全てに楽譜の収載が認められるのは、7位(3回)の《あひるのぎょうれつ》である。一見すると、放送(再演)回数はさほど多くないように思えるが、初出の時期(第52回)に鑑みれば、相対的には番組内で重用された作品の1つであったと見ることができるだろう。小林が自選集(K)のタイトルに採用したことから、本作品に対する彼の自己評価の高さを窺うことができる。

ここで改めて出版譜の有無に着目して全体を概観すると、8位(2回)まで、つまり少なくとも1回以上は番組内で再演された作品であっても、その多くが1つの曲集でしか出版譜を確認することができない¹⁵、もしくは出版譜を全く確認することができない¹⁶例が多いことがわかる。5位(5回)の《おそうじ》はその例外であり、小林の自選(K)を含む3つの曲集に収載されている。

また試みに、中田の自選集(N1)と小林の自選集(K)の双方に収載されている作品を抜き出してみると、《チリンチリンじてんしゃ》《ひらひらちょうちょう》《大きなたいこ》《おそうじ》《あひるのぎょうれつ》《かざぐるま》《きんきんきんぎょ》の7作品を挙げることができる。このうち、《ひらひらちょうちょう》《大きなたいこ》《あひるのぎょうれつ》の3曲はB1・B2にも収載されている。《かざぐるま》《きんきんきんぎょ》の2作品は、いずれも番組内で再演の機会がなかったようであるが、N1・Kの双方に収載されていることから、今後、作品の内容に注目して分析を行う価値があるものと思われる。

最後に、現時点で楽譜の所在が確認できなかった共作(6曲)について、放送台本からそれぞれのインチピットを抜粋し、以下、表3にまとめておく。

表3 楽譜の所在未確認の共作一覧(曲名とインチピット)

回	曲目	インチピット
4	きゅっきゅっきゅ	おててを こすれば きゅっきゅっきゅ
24	すずめのおやど	すず(ゝ)め すずめ/おやどは どこだ
42	どうぶつあそび	ぞうさん おはなは ぶーらぶら
49	なわとび	なわとび、おとびなさい。
50	大工さん	ぎこぎこ のこぎり/だいくさん
68	水まき	じょうろの みずまき/しゃっしゃっしゃっ

3. 6. 《手を叩きましょう》について

《手を叩きましょう》は、保育における重要なレパートリーの1つとして今なお愛唱され続けている作品である。先にも触れた通り、本作品は中田・小林による純粋な共作とは呼べないものの、その知名度の高さ、作品としての価値に鑑みて、本項では放送台本を中心とした調査内容を整理しておくこととする。

第14回（1952（昭和27）年7月5日）において初めて放送された《手を叩きましょう》は、再演回数のランキングでも第5位（5回）に位置しており、番組内でも相応に重用されていたことがわかる。しかしながら出版譜が確認できたのは唯一N2（146頁）のみで、当該楽譜には「小林純一 作詞／中田喜直 編曲」と明記されている。N2の編者である中田自身が「編曲作品」と自認しており、彼は本作品を純粋な共作とは見なしていなかったようである。

一方、《手を叩きましょう》が放送された回（延べ5回）の放送台本では、作者についてそれぞれ以下のように記載されている。

第14回（7頁）	作者不明
第17回（17頁）	作詞 作曲 不明
第33回（17頁）	作詞・曲 不明
第48回（14頁）	作詞作曲、不明
第52回（7頁）	作詞・作曲（※改行）不明

一覧の通り、台本作家であった小林は、少なくとも番組放送当時は一貫して作詞者・作曲者は「不明」と認識していたことがわかる。

なお、JASRACの作品データベース検索サービス（ジェイウィッド J-WID）によれば、現在、小林は「訳

詞者」、中田は「編曲者」として著作権がJASRACによって管理されており、「作詞者」「作曲者」の欄には「P. D.」（著作権消滅）と表示されている¹⁷。現在はこの識別法が最も信頼に足るものと思われるが、N2で「作詞者」とされていた小林がいつから「訳詞者」として定着したのか、その経緯については不明である。また訳詞・編曲の根拠となる原詞・原曲（作詞者・作曲者）の詳細についても、現時点では確たる情報は得られていない¹⁸。

4. 共作によるリズム遊びの実例

4. 1. 第52回（1954（昭和29年）1月4日）

放送：《あひるのぎょうれつ》（初演）

第52回は正月特番として、例外的に月曜日に放送された回である。放送台本の表紙には「昭和二十九年一月三日公演（筆者注：日曜日）」とあり、番組確定表には「日本青年館」「新年子供会より」等の文言が記載されている。「あそびましよう」は2年余りの放送を経てホール公演を実現し、その録音を翌日に放送するという機会に恵まれたようである。

第52回で用いられた曲は、演奏順に《あそびましよう》《手を叩きましょう》《ゆきゆきこんこん》《おつむてんてん》《むすんでひらいて》《チリンチリンじてんしゃ》《ひらひらちょうちょう》《あひるのぎょうれつ》の8曲であるが、このうち終曲の《あひるのぎょうれつ》が初演であった。因みに既存曲の《むすんでひらいて》と、狭義には中田の編曲作品である《手を叩きましょう》以外は全て、中田・小林がそれまでの「あそびましよう」の中で発表した共作の再演である。

放送台本の表紙の次のページには、出演者一覧が次のように記載されている。

出演	
司会者	
独唱と解説	水上房子
人物	コグマのプーチャン（出来たら、みんな、ぬいぐるみで）賀来富士子 コブタのキイちゃん（小さい子ども） 西新井照子 荒
	ウサギのピョンコちゃん～片山愛子
舞踊団	タンダバハ舞踊教室
合唱隊	
合奏団	
指揮	中田喜直
舞踊指導	賀来琢磨

普段のラジオ放送では「お話」の担当者が単独の語り
でストーリーを進めていくところを、この舞台公演では
それぞれのキャラクターがぬいぐるみで登場し、そこに
合唱隊や合奏団、舞踊団まで加わっている。その華やか

で魅力的なステージに、当時の子どもたちが目を輝かせ
ながら鑑賞、参加していたことが想像される。

《あひるのぎょうれつ》のリズム遊びに係る台本内容
を次に抜粋、引用する。

お話 (中略) ーばんおしまいに、おもしろい「あひるの行列」のお遊びをしてみま
しょう。片っぱのお手手をくちばしにして、片っぱのお手々を、おしりのはねにし
て、よちよち歩くおあそびです。いいですか。さあ、はじめます。ほうら。

⑨ M 「あひるの行列」合唱

(小林純一 詩

中田喜直 曲)

あひるの行列よちよちよち
母さんあひるがよちよちよち
あとからひよこがよちよちよち
池までよちよちがあがあがあ

あひるの水あびすいすいすい
母さんあひるがすいすいすい
あとからひよこがすいすいすい
かるそうに すいすい
があがあがあ

お手々をくちばしと、おしりにして、
ほら、歩きますよ、よちよちよち
おしりをふりふり、よちよちよち
よちよちよちよち、よちよちよち
池まで来ました。こんどはすいすい。
泳ぎです。

ほら、すいすいすい
両手を前に出して、輪をかきますよ。
ほら、すいすいすいの、すいすいすい
・・・
・・・

(下線は筆者による)

直前の「お話」の中で、手を使って歩きながら行う体
遊び — 一種のごっこ遊び — を企図していることが示
されている。

曲名以下は、左の列(原本は縦書きのため、実際の位
置は上段)に歌詞が、右の列(同下段)に解説(台詞)
が記載されている。合唱隊の歌唱と同時に、折よく解説
を挟みながら体遊びを促そうとする意図がよく理解され
る。1番の歌詞にあるオノマトペ「よちよち」は、あひ
るの親子の歩くさまを描写しているが、解説の中でもそ
のオノマトペはそのまま何度も用いられている。オノマ
トペの持つ「遊戯(動作)誘導性を評価」(葛西:2021:29)
する小林の理念が、ここに端的に表れている。2番の「す
いすい」も同様であるが、ここでは具体的な遊び方とし
て、両手を使った平泳ぎの動作の指示を解説の中に加え

ている。小林はあひるの足泳ぎを人間(子ども)の平泳
ぎの動作に変換し、リズム遊びの一部とすることを試み
ている。

4. 2. 第55回(1954(昭和29)年2月16日)

放送:《大きなたいこ》(再演)

全放送回の中で唯一、テーマ曲を除いてメイン曲一本
(《大きなたいこ》)で構成された異色の回である。

第55回の考察に先立って、《大きなたいこ》が初演さ
れた第2回(1952(昭和27)年1月26日)の放送台本か
ら、そのリズム遊びの原型について取り上げておきたい。

第2回における《大きなたいこ》初演の場面を、以下、
放送台本より引用する。

お話 「プーちゃん、あそびましょ」って、コグマのプーちゃんのおうちへいきました。
「きょうは、あんよのおあそびだよ」
って、コブタのキイちゃんがいきました。
「うん、あんよのおあそびしようね」
「あんよのおあそびって、どんなの？プーちゃん？」
「それはね、こうするのさ」

M 今回のテーマ「大きなたいこ」 楽器だけで B.G—

お話 っ、コグマのプーちゃんが、おあそびをおしえました。さあ、ラジオを聞いているみなさんも、いっしょにお手手をたたきながら、お歌をおぼえましょうね。

M 「大きなたいこ」（歌）ドーン、トンの個所に効果的に打楽器。

大きなたいこ 小林純一作

おおきな たいこ ドーン ドーン、
ちいさな たいこ トン トン トン、
おおきな たいこ、
ちいさな たいこ、
ドーン ドーン、 トン トン トン。
（歌唱指導三曲ぐらい くりかえす）

お話 「大きなたいこ」っていったら、おててで大きなたいこをつくりましょう。 いいですか、ほら、

M —歌—小節「大きなたいこ・・・」 B.G—

お話 ほら、大きなたいこをつくって、（形の説明を入れてやる）できましたね。「ドーン ドーン」で、どしん、どしん、足ぶみしましょう。いいですか、ほら、

M —歌—小節「ドーン ドーン」（打楽器いれて） B.G—

お話 ほら、どしん、どしん・・・ね、できたでしょう。もう一ど、やってみましょう。ほら、

M —歌— B.G—

おおきな たいこ （ほら、大きなたいこをつくって）
ドーン ドーン （どしん、どしん。）

お話 ね、やさしいおあそび。こんどは「ちいさなたいこ」といったら、お手々で、小さなたいこをつくりましょう。（たいこの形の説明くわしく）

（下線は筆者による）

《大きなたいこ》ははじめ、足踏み（「あんよのおあそび」）によるリズム遊びとして企画されていたことがわかる。ト書きには、「ドーン、トンの個所に効果的に打楽器」とあることから、曲中のオノマトベの箇所を打楽器の音で強調しながら、立体的に歌（詞）の聴取を促そうという工夫を試みていたことが読み取れる。直後の「お

話」では、手（あるいは腕）で「大きなたいこ」の形を作りながら、同時に足踏みによるリズム遊びを行うよう指導している。続く「小さなたいこ」の遊び方も同様である。

第2回の放送台本の終わりには、あとがきのような体裁で次のような言葉が残されている。

目的

音楽の強弱を幼児の動作とむすびつけないため、「大きなたいこドーンドーン」は強く、「小さなたいこ、トントントン」は弱くして強・弱・強・弱を交互に、動作にしていきたい。

このような「目的」の記載は「あそびましょう」の放送台本の中で唯一、この箇所にもみ残されたものである。シリーズの放送開始間もない第2回にあって、小林は明確な目的意識を持って新たなリズム遊びの創出を試みていたことが窺える。当然ながら中田は、小林による上記の創作意図に沿う形で《大きなたいこ》の作曲に取り組んだものと思われる。

「強弱の対比」という極めてシンプルな構想の実現を作品（歌詞）の中で一手に引き受けているのは、オノマトベである。《大きなたいこ》の歌詞には動詞が1つも用いられておらず、動作（の違い）はオノマトベによって端的かつ描写的に表現されている。

本題の第55回では5パターンもの替え歌遊びが一挙に展開されているが、そのようなフレキシブルなアレンジを可能としているのは、偏に原曲（歌詞）のシンプルな構造と、作品としての完成度の高さである。

第55回における5パターンの替え歌遊びの概要は以下の通りである。

- ①大きなラッパ：プー／小さなラッパ：プー
- ②大きなバケツ：ガーン／小さなバケツ：カン
- ③大きな（笑い）声：わっはっは
小さな（笑い）声：おっほっほ
- ④大きな（泣き）声：わーん／小さな泣き声：えん
- ⑤大きな足ぶみ：ドシン／小さな足ぶみ：トン

いずれもモチーフの大小（音の強弱）の違いがシンプルなオノマトベによって表現されており、それぞれが原曲と違和感なく馴染むであろうことは容易に想像される。

最初の替え歌遊びである①（ラッパ）のあと、「お話」には以下のような台詞がある。

お話 あゝ、おもしろかった。おもしろかったですね。・・・ちびっちょのコブタのキイチちゃんは、大よろこびです。
「このお歌だと、いろんな音がだせるね。（歌う）大きなバケツはガーン、ガーン。小さなバケツはカンカンカン・・・ね。」
「そうよ、（歌う）大きな声でワッハッハ、小さな声で、オッホッホ・・・でしょう。」
「そうだよ、もっとほかのおあそびだって、できるんだ。ほら、（歌う）大きな足ぶみドーンドーン、小さな足ぶみトントントン。・・・ね。」

（下線は筆者による）

「音」を拠り所とした様々な替え歌遊びを受容する《大きなたいこ》の誕生は、「あそびましょう」における中田・小林の最も重要な成果、成功例の一つであったと言える。

4. 3. 第73回（1954（昭和29）年10月26日） 放送（最終回）：共作7曲の再演

最終回では既存の歌を1曲も使用せず、全て番組内で生まれた共作を再演する形でシリーズを締め括っている。

番組テーマ曲《あそびましょ》を除く使用曲（7曲）とリズム遊びの概要、周辺情報を演奏順に以下、表4に整理する。

表4 第52回における演奏曲一覧

曲目	リズム遊びの概要	初放送回	放送回数(順位)
大きなたいこ	足踏み	第2回	5(5)
ひらひらちょうちゅう	ごっこ遊び(蝶々の羽ばたき)	第7回	8(3)
あひるのぎょうれつ	ごっこ遊び(あひるのよちよち歩き、泳ぎ)	第52回	3(7)
雨だれ	手拍子	第12回	3(7)
大工さん	ごっこ遊び(のこぎり、カンナ、かなづち)	第50回	2(8)
チリンチリンじてんしゃ	ごっこ遊び(三輪車)	第5回	10(2)
スワンよスワン	ごっこ遊び(白鳥の泳ぎ)	第65回	2(8)

曲数で見れば第52回（正月特番）と同数であるが、ここではやはり、全てオリジナルの共作から選曲しているところに中田・小林の気概と矜持が窺えよう。

リズム遊びの概要は放送台本の記載内容からまとめたものであるが、全体としてはごっこ遊びを中心としたバラエティの豊かさと共に、緩急のある進行を意識したプログラムが組まれていたことが読み取れる。

《大きなたいこ》による生き生きとした足踏み遊びに続くのは、《ひらひらちょうちゅう》のごっこ遊びであるが、これについては台本（「お話」の台詞）上に「静かなお遊び」と明記されている。《雨だれ》では再び、

手拍子を中心としたシンプルな遊びが行われ、続く2曲、《大工さん》と《チリンチリンじてんしゃ》ではその名の通り、全身を使った躍動感のあるごっこ遊びが展開される。終曲の《スワンよスワン》では、白鳥が「みずうみの上をすべっていく」さまを模した穏やかなごっこ遊びが行われる。

15分間に7曲もの曲数を盛り込む都合もあってか、最終回の放送台本には手書きによる取り消し線が数多く残されているが、中でも特に印象的なのは、終曲《スワンよスワン》の解説部分を全てバツ印で削除した箇所である。以下、該当部分を放送台本から引用する。

M 「スワン」独唱—合唱

（小林純一詩
中田喜直曲）

（独唱）

スワンよスワン ~~すーい、すーいすべるんですよ~~

すわんすわんすわん

あおいみずうみ

すべってく

スワンは鳥の王女様

（合唱）

スワンよスワン ~~さあ、もう一度・・・~~

すわんすわんすわん ~~スワンよスワン~~

白いドレスが ~~すわんすわんすわん~~

よくにあう ~~すーいすーい~~

きれいな森の王女様 ~~すーいすーい~~

~~すべって下さいすーいすーい~~

注）第73回台本上のタイトルは《スワン》とされている。

他の6曲については全て慣例通りの解説があり、終曲の《スワンよスワン》の該当部分のみ、明らかに削除の跡が残されている。この通りに放送がなされたとすると、最終回の終末部分では共作の音楽（演奏）だけが静かに流れたことになる。演奏後には「お話」による締め括りの台詞こそあるものの、小林はシリーズ全体の幕を閉じるに当たり、音楽の余韻を効果的、印象的に用いようという意図を持って、あえて解説を削除した可能性も十分に考えられる。また穿った解釈ではあるが、シリーズ全体の終曲に置かれた《スワンよスワン》には、いわゆる「白鳥の歌」¹⁹としての演出意図を読み取ることもできるだろう。

また、《スワンよスワン》のテキストにおける「すわんすわんすわん」は、「スワン」という言葉の響きに着想を得た、小林によるオリジナルのオノマトペであると思われる。

5. まとめ

中田・小林は「あそびましょう」における約3年間の協働の中で、50曲に及ぶ新しい子どもの歌の共作を生み出した。そこには番組テーマ曲や狭義での編曲作品も含まれるが、全73回という放送回数に照らせば、およそ1.5回に1曲のペースで新作が発表されたことになる。これは驚異的なペースである。

特にシリーズの始め（第1期）と終わり（第4期）の時期において、精力的に新作が生み出された。比較的新作発表の機会の少なかった第2・3期においても、それまでに番組の中で発表した共作の再演が度々行われた。これは、中田・小林が自らの共作に自負を持っていたことの表れであると言える。

番組内での再演の頻度と、後に中田・小林が編者を務めた曲集における共作（楽譜）の出版状況（言い換えれば、中田・小林による共作の自己評価）は必ずしも一致しない。《おつむてん》はその最たるものであり、番組内で7回も取り上げられているにも関わらず、出版譜が確認できたのはたった1つの曲集（N1）のみであった。「あそびましょう」における共作の中には、後世に歌い継がれる機会をほとんど得ることのない作品が少なからず含まれていることも事実である。しかしながら、作品の音楽的・文化的価値については、今後丁寧な分析をもって再検討を行う必要があるだろう。

中田・小林の代表作とも言える《あひるのぎょうれつ》《大きなたいこ》については、放送台本をもとに、放送当時の遊び（番組内での指導）の実態について検証を行った。いずれも詩（歌詞）の中心にはオノマトペがあり、そこから想起される「動作」に基づいた平明平易なリズム

遊びが展開されていた。《大きなたいこ》に至っては、その極限的な構造のシンプルさに由来して、1回の放送の中で5パターンもの替え歌遊びを一挙に展開するという例もあった。

オノマトペを基軸としたリズム遊びへの誘い、という創作スタンスは、聴覚を唯一の拠り所とする「ラジオ放送」の制約に対する、小林の最適解の一つであったと考えられる。とかく動画全盛、視覚優位の現代にあって、聴覚への訴求に特化した子どもの歌（創作）の有り様について考察を深めることは、言葉（詩）のプリミティブな力（音あるいは声としての言葉の本質）を再考する上で意義を持つものと思われる。

6. おわりに

戦後の子どもの歌をめぐる研究では、NHK ラジオ番組『子供の時間』『幼児の時間』における「歌のおけいこ」や、同『うたのおばさん』がその発表の場としてクローズアップされることが多く、実際にこれらの番組では現在も歌い継がれる子どもの歌の名曲が数多く誕生している²⁰。番組のタイトルからも明らかかなように、『うたのおばさん』や「歌のおけいこ」のメイン・コンテンツは「歌」であり、番組の中から新たな「歌」の名曲が生まれたことは自然な成り行きであったと言える。一方、『幼児の時間』の曜日番組「リズム遊び」では、ラジオ放送を聴きながら子どもたちが「遊ぶ」ことを目的とし、そこで流れる「歌」は子どもたちの（身体的な）「遊びを引き出す」ことに主眼を置いて創作されている²¹。そのような条件があった中でも、単に「遊び歌」として消費され、廃れてしまうものばかりでなく、今も歌い継がれる真の「歌」として残る作品を生み出した中田・小林の協働の成果は注目に値すると言えよう。

今後は共作の作品分析に着手し、特に知名度の低い作品については、現代における蘇演の可能性とその意義について検証を進めていきたい。

引用・参考文献

- 大地宏子 (2013)、「NHK ラジオ放送の子ども番組にみる「童謡」の変容：『子供の時間』『幼児の時間』『うたのおばさん』を中心に」、『音楽教育史研究』16、音楽教育史学会、25-36。
- 大地宏子 (2014)、「NHK ラジオ番組『幼児の時間』における音楽教育プログラムとその変遷—1935（昭和10）年から1952（昭和27）年を中心に—」、『岐阜聖徳学園大学紀要、教育学部編』53、181-199。
- 大地宏子 (2018)、「NHK ラジオ放送の子ども番組にみる「童謡」の音楽の変容—戦後の童謡を中心に—」、『現代教育学部紀要』10、中部大学現代教育学部、69-82。

葛西健治 (2018)、「『現代こどものうた名曲全集』(二訂)における中田喜直・小林純一の共作—オノマトベの表現に着目して—」、『こども教育宝仙大学紀要』9(2)、95-102。
葛西健治 (2022)、「子どもの歌のオノマトベに関する中田喜直・小林純一の思考」、『こども教育宝仙大学紀要』13、27-32。
全国大学音楽教育学会(編)(2013)、『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌—唱歌童謡140年の歩み』、音楽之友社。

注

- 1) 大地 (2013:33)、大地 (2014:186)、大地 (2018:81 (注16))、「池田小百合 なっとく童謡・唱歌：あそびましょ (<https://www.ne.jp/asahi/sayuri/home/doyobook/doyo00yuyama.htm#asobimasho>)」(最終アクセス:2022年9月26日)等。
- 2) <https://www.nhk.or.jp/archives/about/> (最終アクセス:2022年9月15日)
- 3) <https://www.nhk.or.jp/archives/academic/> (最終アクセス:2022年11月8日)
- 4) 当該回(第43回)については、1953(昭和28)年8月29日付の番組確定表に放送の記載を確認できる。
- 5) ここに示した『幼児の時間』の曜日・放送時間は、1952(昭和27)年当時の内容である。
- 6) 漢字、ひらがなの混同等。例えば、初回(第1回)は「リズムあそび」(「あそび」がひらがな表記)、最終回(第73回)は「リズム遊び」(「あそび」が漢字表記)、第2・3・4回の表紙ではいずれも「リズム遊び(あそび)」の表記自体が欠落、第4回では「幼時の時間」(おそらく書き間違い)など。
- 7) 1952(昭和27)年1月5日付(第2放送)の番組確定表には「野上彰・作/作曲指揮・団(ママ)伊玖磨」とある。『NHK年鑑』5(p.167)、及び同書6(p.73)では「子猫のみんみいちゃん」というタイトル表記がなされおり、番組確定表とは異同が見られる。
- 8) 第49回(1953(昭和28)年11月21日放送)からウサギのピョンコちゃんというキャラクターが追加され、前後してタヌキのボンちゃんの出演が確認できなくなる。キャラクターの入れ替えに係るストーリー上の都合の詳細については、放送台本から確認することができなかった。
- 9) 第3回(2月)《雪》(文部省唱歌)、第20回(9月)《ツキ(おつきさま)》(文部省唱歌)、第37回(6月)《てるてる坊主》(詞:浅原鏡村 曲:中山晋平)等。
- 10) 当該曲集では、「手を叩きましょう」の楽譜上に「中田喜直 編曲」の記載がある。
- 11) 放送台本のト書きには「テーマ」という記載も見られるが、本稿では《あそびましょ》を「テーマ曲」とし、各回を中心となる曲は「メイン曲」と呼称することとする。
- 12) 第16回《肩たたき》(詞:西条八十 曲:中山晋平)、第28回《毬と殿様》(詞:西条八十 曲:中山晋平)、第31回《歌の町》(詞:勝承夫 曲:小林三千三)他。
- 13) 第35回《めだかの学校》(詞:茶木滋 曲:中田喜直)、第39回《かもめの水兵さん》(詞:武内俊子 曲:河村光陽)、第41回《ゆりかごの歌》(詞:北原白秋 曲:草川信)、第44回《どんぐりころころ》(詞:青木存義 曲:梁田貞)他。
- 14) 「おかあさんといっしょ」については2022年11月4日の放送を筆者が実際に視聴し、《大きなたいこ》の放送を確認している。また「いないいないばあっ!」については「過去のエピソード(2022年8月18日)」(<https://www.nhk.jp/p/inaiinai/ts/E4G3263MG7/episode/te/B6W92JXXMQ/>(最終アクセス:2022年11月9日))の記載内容に「おきなたいこ」のタイトルを確認することができる。
- 15) N1のみの収録は11曲(《あそびましょ》《おつむてんでん》《ゆきゆきこんこん》《じゃぶじゃぶせんたく》《あるきましょはしりましょ》《いもむしごろごろ》《シーソー》《おしくらまんじゅう》《おすもうさん》《どうぶつあそび》《えっちら山のほり》)、N2のみの収録は2曲(《雨だれ》《スワンよスワン》)である。
- 16) 《きゅっきゅっきゅ》《どうぶつあそび》《大工さん》の3曲が該当する。
- 17) https://www2.jasrac.or.jp/eJwid/main?trxID=F20101&WORKS_CD=05400023&subSessionID=001&subSession=start (最終アクセス:2022年10月20日)なお、JASRACの「作品タイトル」表記は「手をたたきましょう」である。
- 18) 独自研究ではあるが、HP「世界の童謡・民謡」内「手をたたきましょう 歌詞と原曲」(<https://www.worldfolksong.com/songbook/czech/tewotatakimasho.html> 最終アクセス:2022年10月20日)では、リトアニア民謡《クルンパコイス Klumpakojis》を原曲とする説が提唱されている。
- 19) 死ぬまぎわに白鳥がうたうという歌。その時の声が最も美しいという言い伝えから、ある人が最後に作った詩歌や曲、また、生前最後の演奏など(『大辞泉』第二版、小学館)。
- 20) 《とんぼのめがね》(詞:額賀誠志 曲:平井孝三郎/1949(昭和24)年)、《おつかいありさん》(詞:関根榮一 曲:團伊玖磨/1950(昭和25)年)、《こおろぎ》(詞:関根榮一 曲:芥川也寸志/1951(昭和26)年)、《ぞうさん》(詞:まどみちお 曲:團伊玖磨/1952(昭和27)年)等。
- 21) 『幼児の時間』のチーフディレクターであった武井照子は「あそびましょ」の企画の趣旨について、「当時のヒットメーカー、小林純一、中田喜直のコンビで、歌いながら身体を動かす、遊び歌を作ろうとした」と回顧している(武井照子「幼児番組の変遷〈その3〉～終戦後の番組再開から『うたのおばさん』まで～」、『放送教育』9月号、日本放送協会、p.73)。

付記

本稿は日本保育学会第75回大会において筆者が発表した内容に、大幅に加筆・修正を行ったものである。

